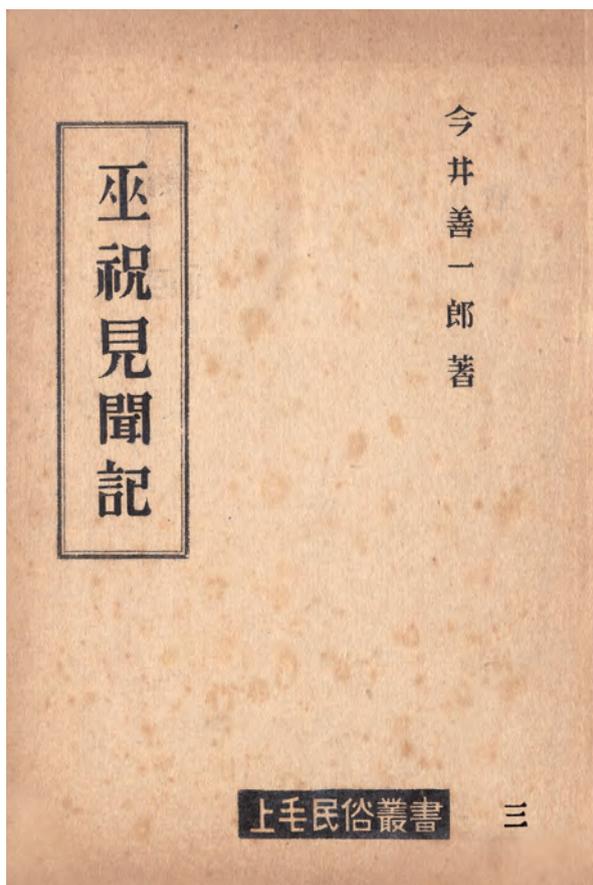


上毛民俗叢書第三輯

巫祝見聞記

復刊版



群馬地域文化振興会

巫祝見聞記

人三升尾者

一卽

本書は、仮に前後編に分れてゐるが本来両卷は全然別の目的で書かれたものである。しかし両卷共一應見聞記となつてゐるので同輯した。見る人益せらばよ。

前

編

前編 目次

奇蹟の实在	一	下馬路し	六
山の行者	一	呪文としての和歌	六
眞壁山伏	二	藪の橋成	六
ボンデン	二	坐立て	七
八丁注連	二	練行	七
神主起原	三	觀看跳躍	八
齋戒忌避	三	行者の感力	八
呪ひ	四	鈴ヶ嶽の神異	九
不信を受けず	五	筒形	一〇
火傷せし老婆	五	壘目	一〇
剣渡り	五	病者と山神の告げ	一一
不動金しはり	六		

奇蹟の実在

大正十四年の春、私の村で火渡りが行われた。之は村々大字内の武尊山の信者が隣村大字眞壁の先達を母じて行つたのである。村内の人達は大概見物に出て且つどの燃えてゐる火中を渡つた。その年私の家では若い叔父が病死したばかりなので家の男達は見物に行つたが渡らなかつた。この様で夜中の人は燃くても渡らないという。私は家に居たので見なかつたが着目見えて来てこの新しい実見を話した。

話の大要は深山籍を燃して大体燃え切つて眞志巨オ子に居つた時オンベロで火を操せてもつかなくなると渡るのでという。炎が立つて行者の白衣の裾を舟めども燃えないという。村の人達は女子伏せ渡つたが一人も燃くまいと云うのであつた。火はザク／＼云ふ程厚く積まれた上を渡るのであるとの事。

当時十七才の中學生であつた私は自分の合組主義からこの奇蹟めいた行事はどうしても合長かいかなかつたのである。これしきの事が解明出来なくて何の學問の価値があらうと思つた。そして豫い／＼興味をこの

一面の信者の群に寄せた。

山の行者

当時私の地方で最も喧はされてゐた行者は「ハセエの先達」という人であつた。佐夜節三軒村波志江の人。寂沢心明という人の事である。群によればこの人は隣村横野村瀧呂木に幼時育つたといひ、若くして山の信者に入り早く利根郡の武尊山を兩廻したと云はれてゐる。常に信者の家を訪うて加持祈禱を爲し又数々の呪術を行つて神異をあらわしたという。居村では村の鎮守の神職をも勤めてゐた。

隣村眞壁にはこの寂沢氏の信者と弟子があつてどの指導によつて教名の先達が出来てゐた。瀧呂木に三属講という講社があり之は表面御嶽教に所屬してゐたが寂沢氏の事ある所で眞壁にはその分講があつたのである。

寂沢氏の弟子に隣村産土見村中蔵に清水信明という行者が居り之が寂沢氏についてこの地方を廻つてゐた。この人は寂沢氏の態度堂々たるに反し百姓爺さんどの

まゝの人で一般の農家に何のこたゆりもなく定泊し農繁期
后とは餘暇の暇后とに寸口腹してもかまわぬ様で入て
あつたが法術の一点に於ては師匠にも分らぬ神能を現
わした。この兩人共先達であると共に神が、り左にた
人である。

眞壁山伏

藤村眞壁には萩原直依といふ先達がゐた。この人も
行のつんだよい先達で又物静かき篤行の人であつた。
どの外に眞壁には多くの行者が居た。何故こゝの人達
がこの様に熱心であるかはわからぬが所謂土地柄で
あろう。

徳川時代にも此村には清光院、福泉院、大学院、大
泉院等四戸の百姓山伏が住んで居た。俣谷に「眞壁山
伏」と呼ぶ程村民と修験との因が近かつたという。こ
の人達は当山山伏であつたが他の近村の本山山伏が
堂々と本業の修験をしてゐる向に百姓山伏として平常
は農に従事し夜ら村民の面に徳御を保ちついで来た
のである。明治以後一度廃絶した五祀の道が剝嶽教の

名の元に復興した事は怪むに足らぬ。かゝる山伏は

ボンデン

其の最盛山に在り小旅行したりする中に私は奇妙な
物に気がついた。竹竿の先に蓼葉の管標をもち立つ
之に沢山の紙の幣束を付けたものである。一寸標の紙
幣ものである。人にきくとボンデンと云つて神に祈願
する人が袖標に添げる物だという。思はぬ哉の端。湧
水の辺り、神社の後の丘の上、懸崖の上ほどに見受け
られた。しかし幾つかの例を調べると結局これは供所
では全く神の依代でありそのいづれも山の行者達が立
てたものである事がわかつた。主に願事のある時に立
てるが、頭乞ひ等々又行場にも立つてゐる例もあつた。
しかし之を何故ボンデンといふかは誰も知らぬ。
ボンデンは石州半紙二百枚位使用するという。

八丁注連

飯の大字では毎年夏冬の六夜の日には鎮守の祭壇があ

り裏神を祭つて八丁注連というものを依る。村から他村に通ずる道の境原に立てるのである。近村も皆同様である。しかるに私の隣郡若(大字は同じ)では毎年冬至祭といふ祭を行ひ吉盃の家に乗つて眞鍮の先達を招びて祈禱を行ひ且つこれと同じ八丁注連を切る。村の八丁注連と同じように枝二三本つきの青竹の幹に四角片神札を挟んで部落の四至と中中央に立てる。村のは裏神三神とあるに對し之は武尊山御守護とある。部落の中中央に立てるのか他は八丁注連とは異なるがこれにして、もこれによつて一部落内に邪惡の入るのを防ぎ安寧を保持してくれる訳である。つまり神社神道の神主発生效前の状態をこれは保持したものであらう。神社の室神祭はこの方式を合理化したものと考へられる。

神主起原

これは見聞記以上に仔細であるが、この辺の神職は明治に初まつた人は國辱の影響によるがそれ以前の神主は大體修験の昇化したものである。「舞阪」などという特殊の家柄はまゝ見受けるが一般に宮坐の如きも

のの全然ないこの地方の神社は早くその裏祭を別当寺が修験に委ねたのである。この両着共經文符とよんで形式は面影の信仰であるが精神の上から穢を極度に嫌つて古神道の面影をよく傳えてゐる。従つてその反面土俗行事の上に昔の修験の行つたであらう。行事の殊つてゐるのやそれ在今の神社神道で継承してゐるのも當然と思はれる。

觸穢忌避

これは最近の話であるが隣村に一家七人を野荒しして捕えられた事件が起つた。その善女は有名な某元龜の娘で、先輩の子息が今も行吾をしてゐて加禰祈禱で相当名が聞えてゐる。この行吾の所へ別の親戚の人が訪ねて、姉が悪い事をした事故その村へ出向いて共に説びてくれるよう依頼したところ件の行吾は長い間無言であつた相であるが「人間の皮を着てゐる同はともそれ自身は出来ません」と断つたという。一語に説びようと依頼に行つた親戚は止むなく一人を歩いたと云う。

「行者存んでぞん存ものか有あ」と件の親戚の人は
私に感慨をもちたのである。「師教や基督教などのよ
うな道徳性の高い宗教に比較すると実に交与事だがそ
れはやはり全然自分と同居しなれといふ潔癖の様
な信念から云うのではなけれど、罪滅とはたとへ
肉身たりと同じきに居れぬといつた氣持かと思つ
と一應私は答へたけれどやはり心に満足は出来なかつ
た。

呪　ひ

私は少年の頃の師の先生が「神は敬して禱はずしと
いう事を教へてくれたので私かに服膺して来た。従つ
て手とつて大人になつても神佛に頼事はしない事にし
て来た。毎朝神佛を拜するがその時は「今日は何卒願
ふ心下さい」と云う事にきめてゐる。しかるに妻帯し
て二番目に出たのが男であつたが生後阿も早く小児
麻痺という病に病氣になつてしまつた。そして母夜
坂らずに夜泣きするのである。私は妻と交臂に坐つて
抱き下ら眠らせ続けた。匠治は廣徳病院へも長く入院

したが外來の薬は絶えず主治医は徳吉などしてしまつて
又故郷へ連れ帰つた。どこで多くの親戚知人が種々の
厭癖や祈願をしてくれるのであつたがその好意は家對
しつゝも實際にきくとはいつても老へられなかつた。ど
の中、母が二回この不具の孫を養育つてお野という一
與も離れた村の地蔵様へお願ひに行つてくれた時は文
句なしに涙が出た。その外に一度奇異な経験をした事
がある。それは三十年も私の家と勤めてゐてくれる百
姓頭のお井野吉老人が私かに眞壁の先達戒嚴重依氏を
訪ひ訪禱してもらつて来た時であつた。これ迄何回も
私はこの事をすゝめられたのであつたが皆斯つたので彼
りで待つてもらつて来たのである。その時の礼は今も
残つてゐるが「武尊山虫封御守護」と表に書かれて赤
印が捺してある。そして不思議な事に一年中一夜とし
て泣かぬ事の母い子供がピツタリと泣き止んだ事であ
つた。この事が三夜つゞいて、其後は又昔に返つてし
まつたのである。私は老僕の眞情にも感銘したがこの
不思議には実に驚いたのである。しかも信仰心正起す
事を終にしなかつたのは恐る可き因縁であつた。

不信を受けず

実敬神は不信を致し得ないらしい。右の萩原氏の二男を木暮氏を頼んだ元明氏の言として又聞きにきいた事があるが、元明氏は行通ではないが先達から來立きを止める死むを教へた。その時これは易しい事なのだが「ナンダ二ん易しい事かし」と馬鹿にしたら必ずまかなく与ると云はれたという、而して元明氏は實際して親して子供の夜泣きは止まらなかったかやはりこれなら何時でも出來ると思つた相である。そして此以來思はまかなく居つたという。この話は木暮氏から息子の嫁文を讀つた狩野三律五郎老人の談である。この老人も五十手も以前から私の家に勤めてゐる老番頭で本志の結である。

火傷せし老婆

五生程以前小学校時代の友人の家に一寸立寄つた前老母堂が臥つてゐるので如何したかと聞くと「お婆さ

んは火渡りをして火傷したのだが、又だは語せぬし事柄の正察つて歸つて來て處てゐるのだ」といふ返事、一體火渡りは前鬼の人藏れてゐる人寮中の人等が炭火は火渡すると云はれてゐるのゝ火傷したと云へば自分か悪者だと自白するに等しい事になる筈なのである。とに舟火渡りの火は決して熱くなく、或る人面には火傷をさせるだけ熱いものだといふ事は証明されたと思つた。

ツルギ

劍渡り

火渡りと並び教せられる荒行は劍渡りである。恰吉老の實見談によれば眞鍮で一度この事があった。先達は深沢心明で農家の新先に背竹二本に刀の刃を上にして荒縄で梯子として結へたものを登りつぎに立てかけ呪法を修して登つたという。先達は非常な大きな聲で呪文を唱えつゝ、登り以下一級の男女老幼皆白刃の上を登つたがやはり一人も怪我をしない人は居かつたという。火渡りよりもずっとコワイものだという。

不動金しほり

下馬落し

一般に云ひはやされてゐる呪術に不動の金しほりと云うのがあつた。要するに特定の人を咒縛するのである。下宿田の行舟高橋康平老人の話に東の村で火渡りのあつた時見物中に一人の行舟がかくれ火止めの策中にひとかたに火炎しの術をかけてゐた。この意何時になつても火祭が去らぬ。元来は不審に思つて悪首に對する不動金しほりの法をかけた。その上見物に向つてこの中に一人修法の邪魔をする人があるのを今金しほりをつけて。依つて一時一同は退去して貰いたい。後に究めのが邪魔をしてゐる人聞だからとて一阿を去らせに。眼して一人の男が動けずに死んで行舟仲間の醫をうけどという。

この話は一寸説話臭があるが聞いたままに記しておく。この高橋氏の布匠は勢多郡宮城村の地丸親兵衛といふ先達でえらい人であつたといふ。東の村とはこの村の事か。

下馬落しというのは修験の術をハソンするといふ條に愉快な詠物であるが、意味は馬上の人を落馬せしめる事だ。之も一つの呪術に存つてゐる由。昔は秋鹿とかめきする神が非常に多かつた。神にこの特性を認めるといふよう各人々の氣風がこの呪術の存在を察し、このものである。

呪文としての和歌

秋原清忠氏（故重依氏男）の談に百人一首は全詠呪文と存つてゐるものだといふ。火伏せもあつた甲の呪一首を用ひるのだとの事であつた。この人は行舟でよく傳道であらう。非常に興味ある事に私は聞いた。

◎ 講の構成

講は信仰者の団体である。信仰の対象は山神、密士二荒、御族、武尊等がある。此期古くは表向きは大體御敷敷に属してゐる。